

# 日本語文章、 あるいはその互換性

NIPTA理事／日本アイアール株式会社 代表取締役社長  
矢間 伸次



日本アイアール知的財産活用研究所は、「世界で通用する（戦える）特許明細書づくり」を目指している。今回は知的財産活用研究所が纏めた報告書を紹介することにした。

日本の特許仕様書（明細書）の日本語文章は、文章になっていないと、これまで散々悪口を書いてきたが、日本語文章という主題の全体を眺めてみると、読んで意味が取れない文章、意味があいまいである文章は、そこら中に在ることに気がつく。

ここで対象としている日本語文章は、もちろん、自然科学・技術と社会科学の分野で使われているもので、文学とか哲学の分野のそれではない。対象をこの分野に絞っているのは、知的財産活用研究所の使命を、次の行動を支援することに置いているからである。それは、日本の知的資産を知的財産化する、すなわち文書化して、世界の人々に伝え、困難（環境汚染資源枯渇等）に直面している世界全体に貢献する行動である。

貢献するためには、ほんの一握りの人だけが実行すればいい話ではなく、社会システムから経済活動、技術まで、さまざまな分野で存在する知的資産に関係する多くの人々に参加してもらわなければならない。したがって、実に多くの人々が、私も含めて、日本語文章

での表現能力を改善する必要がある、という点に行き着くことになる。なぜなら、世界の人々に、われわれが持つ知的資産を理解してもらいそれを活用してもらうには、理解していただける記述をしなければならないからである。

情感として何らかの感動を与える文章の世界ではなく、伝えたい事実を正確に理解してもらい、あるいはこのようにしようという提案を明確に理解してもらい、あるいはこのように実行しようという計画を理解し受け入れてもらうための文章は、正確さが第一であり読んで支障なく頭に入っていき素直さが第二である。それらを実現するためには、論理的に明確な記述であることが土台となる。

論理的に明確な記述は、言語を中核とする文化と歴史に基盤を置く社会慣習が、われわれのそれとは大きく異なる世界の中のさまざまな人々の理解を求めるための、多分唯一の方法である。したがって、世界の人々に何ごとかを伝えるためには、好むと好まざるに関わらず、得意である苦手であるに関係なく、何が何でも論理的に明確に、そしてそれらを明快に記述する能力を高めなければならない。この課題を背負わされている人は、国民の10人に一人はいるはずだ。つまり世界に貢献しうる知的資産に関係している人はそれぐらいいるだろうと私は見積もっている。

この論理的に明確な文章とは、別の角度から眺めれば、世界の主要言語、とりわけ世界の共通事項を語るための共通手段としての英語文章と、「互換性」が取れている文章であると定義することが可能であろう。その観点から、世に存在している日本語文章を次のように等級分けしてみる：

- A：日本語として整っており同時に英語文章に正確に転換できる
- B：日本語としていささかごつごつしているが論理的に整っており、英語文章に正確に転換できる
- C：日本語を母語としている人にはほぼ理解できるが、英語文章に転換するためには、いくつかの箇所で補修が必要である
- D：普通の理解力を持っている日本語を母語とする人が読んでも理解できない。したがって、英語をはじめいかなる外国語にも転換ができない。落第（赤点）。

この、世界の共通事項を論理的に明確に語るための日本語を、我々は「Open Japanese」と呼んできており、従い、主要外国語と互換性を持つ日本語文章は、オープン・ジャパニーズによる文章と言い換えることもできる。しかしそのような名称にこだわるつもりはまったくない。基本は、互換性を常に意識して文章を作り上げる必要があるというところにある。

どのようにすれば、互換性のある日本語文章を書くことができるのか？

ここに一つの特許仕様書（明細書）がある。その冒頭の「技術分野」を説明した3個の文章を見る。

- (1)「本発明は表面保護フィルムおよびそれを用いてなる粘着物に関する。」
- (2)「本発明の表面保護フィルムは半導体の製造工程や液晶ディスプレイ表面に好適に使用できる。」
- (3)「特にアンチグレア処理された液晶ディスプレイ表面などの粗面化処理された面に対し好適に使用できる。」

(1)に関して：(文章等級D－赤点)

以降の説明を読むと、本発明は表面保護フィルムに関してのみと理解できるが、「それを用いてなる粘着物」という物体の正体が分からない。フィルムを利用して何かもう一つ粘着性のある物体を発明したのだろうか。「それを用いてなる」というあいまいな、こなれていない表現が、読む人に、「はて何のことだろう」と戸惑わせる原因となっているだけでなく、「粘着物」という単語が、粘着性を持った材料（物質）なのか物体なのかが判定できない。つまり、書いている人だけ理解していることになるだろう。従って、この文章だけからは英語に翻訳することは不可能である。

**広告**

## (2)に関して:(等級D)

製造「工程」とディスプレイ「表面」は概念的にまったく別のもので、同列に扱うことはできない。また、「製造工程」という一般概念だけでは、そこに使用できると言われても何のことか理解できる人はいない。さらに、「好適に使用できる」というおかしな日本語も次に出てくる。先ず言語としてこなれていないし、それ以上に、ここは「技術分野」を特定する場であるから、「うまく使用できる」かどうかを論じる場ではないことを、書いた人には何とか理解してもらいたいものである。この文章をそのまま英語文章に仕立てても、その英語文章を読む人の理解は得られないことになる。

## (3)に関して:(等級C)

液晶ディスプレイ表面の特定化をはかっている文章であるが、「アンチグレア処理」という言葉は何とかならないものか。アンチグレア処理されると表面が粗くなる「らしい」と推測はできるが、自分達だけは分かっている、常識であると思いついでいる言葉をそのまま説明抜きで提示されると「嫌な感じ!」となるのだが。もう一つ付け加えれば、この文章には「主語」がない。日本人であれば、「保護フィルム」が主語であることは推測できるが、発明を厳密に規定していく仕様書としては、やはり主語抜きは止めてもらいたい。この文

章を英語に翻訳する人は、私と同じように、この文章の主語は「保護フィルム」であろうと“推測”して翻訳するだろう。翻訳者が文脈から推測して言葉を追加しなければならない原文はきわめて危険であるとも言える。

## 全体として:

- 1) 「技術分野」を特定する場で、何を規定すべきかが書いた人の頭の中で明確になっていないため、「好適に使用できる」という本発明製品の「利点」記述が含まれる結果となっている。
- 2) 工程と製品という概念が異なる事項を一つの文章内に並列していることは、何を説明しなければならないかが、はっきり理解できていないことを示している。
- 3) 本発明が「保護フィルム」だけなのか「粘着物」も関係しているのか不明という重大な欠陥がある。「粘着物」が本発明の技術分野であるのなら、さらにもう少し分野を特定する次の文章で何等かの特定を行わなければならない。特定されていないため、「粘着物」が分野の範囲なのかどうか不明のままここでの説明が終っていることになる。

特許権利を取得するために、何百万円かの経費をかけて仕様書を作成し出願しているのだから、もう少し文章に注意をして記述してもらいたいものだ。

## 特許英語を、本物の発音で学ぶ

米国特許文書の作成と出願の基礎や手順を教材にして、  
ネイティブイングリッシュで「特許英語」が学べます!



### <こんな教材です>

米国特許司法試験対策講座で活躍中の3名の講師が、  
日本人向けに作成した講義です。  
視聴するうちに特許の専門用語が自然と身につき、  
実務で使える英語力がアップします。

時間: 1講義 約50分程度  
価格: 1講義 10,000円(税込)  
視聴期間: 3ヶ月間  
備考: 視聴にはWindow Media Playerが必要です。



お問い合わせはこちら

ナレッジプレイス

検索

<http://www.knowledge-place.net/>

日本アイアール 株式会社

電話 03-3357-3467

FAX 03-3357-8277